

課題名：収益性の高い果樹経営の実現に向けたモモ産地の育成
課所名：鹿角地域振興局農林部農業振興普及課

1. 取組の背景

秋田県鹿角地域は、青森県、岩手県と接する県内陸北東部に位置し、年平均気温は 9.4℃（気象庁、1981～2010平年値）で典型的な内陸性気候である。

果樹は、明治期からリンゴ栽培が行われており、昭和40年代前半にはリンゴの栽培面積が1,000haを超えたが、現在では約1/4まで減少している。特に平成になってからは、気象災害、土壌病害、経済状況の変化などにより、リンゴの収益性が低下するようになり、このような中、一部農家ではリンゴ以外の品目としてモモを導入する動きが見られるようになってきた。特に9月のモモは需要があるものの生産量が少なく、比較的高単価で取引されていること、当地の‘川中島白桃’が9月に収穫期を迎えることから、モモの優位性に着目する動きがでてきた。これを受け、平成12年に市が事務局となって「特産北限の桃産地推進協議会」（以下、推進協議会という。平成14年度まで活動）が設立され、モモの産地化に向けた本格的な活動が始まった。



収穫期を迎えた
かつの北限の桃

2. 活動内容

産地形成の初期から現在まで、普及組織と生産者、関係機関が一体となり、産地内外の現状把握や情報発信を行い、作付面積の拡大、高品質果実生産に向けた技術向上、品種のシリーズ化による継続した販売体制の整備等に向けた活動を展開してきた。

[平成13～15年]

果樹経営の安定化に向けた樹種複合の推進に向けて、① モモ栽培者の獲得と導入推進、② 栽培技術の向上（各地域で作業毎の濃密指導）から支援活動を開始した。



女性を対象とした
現地講習会で技術力向上

[平成16～19年]

モモの生産技術向上による生産拡大に向けて、① 作付面積の拡大、② 商品化率の向上を支援した。

[平成20～22年]

「高品質」、「安全・安心」をキーワードにした「北限の桃」ブランドの育成に向けて、① 秀品率の向上、② ポジティブリスト制度への対応と生産工程管理手法の推進を支援した。



目揃い会で適期収穫の
励行を指導

[平成23～25年]

収益性の高いモモ経営の実現に向けて、① 単収と秀品率の向上を支援した。

3. 具体的な成果

(1) 栽培戸数、面積が拡大

平成12年、52戸だった栽培戸数は、平成23年には約3倍の157戸に、栽培面積は5haが約57haにまで増加した。一時は、凍害、キクイムシ等により拡大が鈍化した時期もあったが、最近では、野菜栽培農家でモモを導入する事例も増加傾向にある。主産地から見ると非常に小さい産地であるが、平成24年には北東北で初めて「全国モモ研究大会」を開催するまでに至った。



図1 JAかづの北限の桃生産部会の栽培面積と戸数

(2) 生産量と販売額が増加

平成14年の非破壊光センサーでの共選集荷の開始時は、出荷量約12t、販売額約450万円だったが、平成24年は出荷量約380t、販売額約121,445千円に達した。

平成20年産からは、透過型の非破壊光センサーが導入され、

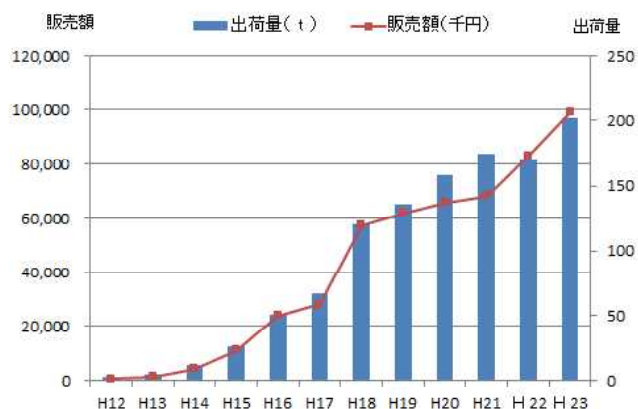


図2 JAかづのにおける桃の出荷量と販売額

より高い精度の選果が実施されたことにより、消費地からは品質面で一層高い評価を得ている。

(3) 継続出荷に向けた品種のシリーズ化

産地化に向けた取組当初は、‘川中島白桃’をメインにその受粉樹となる数品種の植栽であったが、継続出荷が求められるようになったため、有望品種の検討を進め、事業等で導入支援を行ったことで、現在では10月初旬までの出荷体制が整いつつある。

特に近年は、‘川中島白桃’以降も需要が継続するため、晩生種の‘玉うさぎ’、‘さくら’の新改植が行われている。

表1 平成15年頃の主要品種構成

	8月	9月	10月
あかつき			
川中島白桃			
黄金桃			
ゆうぞら			

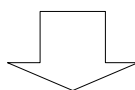


表2 最近の品種構成

	8月	9月	10月
あかつき			
川中島白桃			
まどか			
玉うさぎ			
晩生川中島			
さくら			

(4) 県域への取組拡大

鹿角地域のモモ導入による樹種複合に対する取組は、秋田県南部の産地にも影響を与えて取組が拡大しており、県域でのモモ栽培拡大につながっている。

4. 現状・今後の展開等

(1) 更なる産地拡大に向けた取組

J Aかづのにおける平成24年産モモの出荷量は、加工品も含めると約380 t弱であり、そのうち約半分が首都圏へ出荷されている。卸売市場では鹿角産‘川中島白桃’が徐々に認知されつつあるが、9月の出荷量は東京卸売市場では約9%ほどしかなく、更なる産地基盤の強化が必要である。

現在の栽培面積は、平成24年度末時点で約59haと拡大してきたが、果樹産業

は、他に比べても新規参入者の不足や高齢化が著しく、産地の先細りが懸念される状態にあり、産地の維持のためには法人化等も含め、新たな栽培者を確保していく必要がある。

更に、これまではリンゴ栽培農家主体に、果樹経営の安定化を主眼に置いて産地化を推進してきたが、最近では野菜栽培農家のモモ導入も増加しており、野菜との複合経営確立を目指した支援も必要である。このような支援については、今後「鹿角果樹産地協議会」を核とした具体的な事業実施により促進することとしている。

(2) 収益性の高い経営の実現

本格的にモモの産地化に向けた支援に取り組み本年度で14年目となる。これまでは着果量を制限することで、品質の良い美味しいモモを作ることを主眼にした指導を行ってきた。この間の東京都卸売市場における9月の平均単価は、一定の高い水準にあり、指導の方向性は正しかったと認識している。また、生産者の技術も徐々に向上し、作業内容の理解度や樹の観察力が養われてきており、今後は、更なる収益性の向上のため樹齢や樹勢に応じた着果管理により、高品質を維持しつつ単収向上を図る必要がある。

また、‘川中島白桃’以降の品種の導入と生産量の増加を図り、長期間継続して出荷できる体制を整備・確立し、切れ目ない出荷により販売力の向上を目指す必要がある。



「目指そう 日本一おいしい 桃産地」

これらの実現により、北限のももの認知度向上を進め、生産者、関係団体一体となって、「目指そう 日本一おいしい 桃産地」のスローガンのもと、更なる品質向上や産地拡大の取組をすすめることを関係者一同で確認している。